

管理表示・管理放送の増加とその効果に関する研究

—— コミュニケーションからアーキテクチャへ ——

札幌大谷大学 西脇裕之

1 目的

本報告は、人びとの意識を啓発し行動を誘導・管理するために設置・放送されている管理表示や管理放送が増える原因について、またその効果上の問題点について、コミュニケーションの枠組ではなく、アーキテクチャやアフォーダンスの枠組から捉え直すことを目的とする。

駅などの公共空間では管理表示が多数設置され、管理放送が繰り返し流されているが、それらの量的な膨大さに対して、その意味内容についての人びとの認知の希薄さは好対照をなしている。この点を説明するためには、禁止・警告・マナーを呼びかけるメッセージの伝達—理解というコミュニケーション論の枠組ではなく、特定の行為を潜在的に許可する環境特性としてのアフォーダンス、特定の行為の可能性を意識させずに規制する環境条件としてのアーキテクチャという枠組で、管理表示・管理放送を捉え直すことが望ましいと考える。

2 方法

まず、管理表示・管理放送の「氾濫」状況について問題提起をしてきた中島義道氏らの論考を検討する。そこでの主な検討点は以下のとおりである。①管理表示・管理放送の増加の原因を管理者側によるパターナリズムとそれを要求する利用者という一種の共謀構造に求めてよいか。②管理表示・管理放送を求めていながら、それらを気に留めないというマジョリティの一見矛盾した姿をどのように説明するか。③管理表示や管理放送が意図した通りの効果をもたらしているとしたら、それはその意味内容についての人びとの認知と理解を経由していると解釈してよいか、それとも身体が半ば無意識的に行動してしまっている、とみなすべきか。

さらに、近年注目されているアーキテクチャによる人びとの管理・誘導の手法について検討を加え、管理表示・管理放送をアーキテクチャという枠組で捉え直すことを試みる。

3 結果

上記の①については、利用者が管理者側にその意図を察して代弁するパターナリズムを求めているという中島氏らの説明に対して、利用者が求めているのはメッセージが自分に向けられているというコミュニケーションの形式それ自体であるという相互行為儀礼の解釈を提示する。②についても、利用者がそこに儀礼的な価値しか見出さないのであれば、その意味内容は十分に認知されないこと、従って管理者側が意図する効果が期待しにくいことが考えられる。③については、中島氏も指摘している通り、管理表示・管理放送は人びとを身体レベルで半ば無意識のうちに誘導する、という側面がある。この点がアーキテクチャによる管理・誘導やアフォーダンスによる行動の調整と似た特徴であり、アーキテクチャの枠組で管理表示や管理放送を捉える可能性を示唆している。

4 結論

管理表示や管理放送が増える原因は、利用者がパターナリズムを求めているからではないこと。それらが膨大なサインの洪水とも言える様相で配置されておりながら、なお行動の誘導・管理という効果を上げるとすれば、そのメッセージの意味内容の理解を経由してというよりも、環境条件への身体レベルでの適応としてである、と解釈できる。